



Title	Interface humanities 04
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12959
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイス の人文科学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Interface Humanities

04

モノの人文学

Contents

特集 モノの人文学

- 2 「研究集合」宣言—あるいは知のターミナルの創造のために
富山一郎
- 6 特集 モノの人文学
藤田治彦 聞き手 三谷研爾
- 11 「医師と聴診器」 山中浩司
- 12 「音楽を読み解くためのピアノ」 筒井はる香
- 16 「空き瓶と町」 森田良成
- 17 「緑黒釉掛分皿」 猪谷 聡
- 18 「モノ・ツクモ、カガミ・ココロ」 荒木 浩
- Interface 人とネットワーク
- 22 流動性と閉鎖性のダイナミズム
トランスナショナリティ研究
- 24 音楽はなにを描くか ステラ・ジブコバ
- 25 社会にひらかれた対話の知 屋良朝彦
- ih.Topics
- 26 Event Report 2004
平成16年度懷徳堂春季講座(107回)
「生のかたち 死のかたち」
- フィールドのざわめき
- 28 シルクロード出土文献の現物調査
佐藤貴保
- 人文学のフロンティア
- 30 “実験”美術史学?—シャガールの源泉を求めて—
樋上千寿
- 32 編集後記

Feature: Humanities of material world

- 2 New Program of Interface Humanities
Ichiro TOMIYAMA
- 6 Interview with Haruhiko FUJITA
Interviewer: Kenji MITANI
- 11 Physicians and Stethoscope
Hiroshi YAMANAKA
- 12 Piano as an Instrument for Musical Interpretation
Haruka TSUTSUI
- 16 Empty Bottles in Town
Yoshinari MORITA
- 17 Dish, green and black glazes
Satoshi INOTANI
- 18 Mirror, Heart, or the Ultimate Appearance of Things (MONO)
Hiroshi ARAKI
- 22 Transnationality Study: Dynamics of Flowing and Closing
- 24 Representativity of Music: Stella ZHIVKOVA
- 25 Dialogical Knowledge Open to the Citizens: Tomohiko YARA
- 26 Event Report
- 28 Inspection of Tangut documents in St. Petersburg
Takayasu SATO
- 30 "Experimental" art history? The origin of Chagall
Chitoshi HINOUE
- 32 Editorial Note



Interface Humanities



「研究集合」宣言

—あるいは知のターミナルの創造のために

富山一郎

ネットに触発されながらますますまいいスピードで流通し、軽やかに拡散していくポピュラー・カルチャーの横で、さまざまな境界をめぐる文化の衝突がある。また、国家を超えて世界を支配する制度の拡大と同時に、より強固な小集団への閉塞がある。文化であれ制度であれ、これまでにない流動化と閉鎖あるいは衝突が、今、同時に起きている。

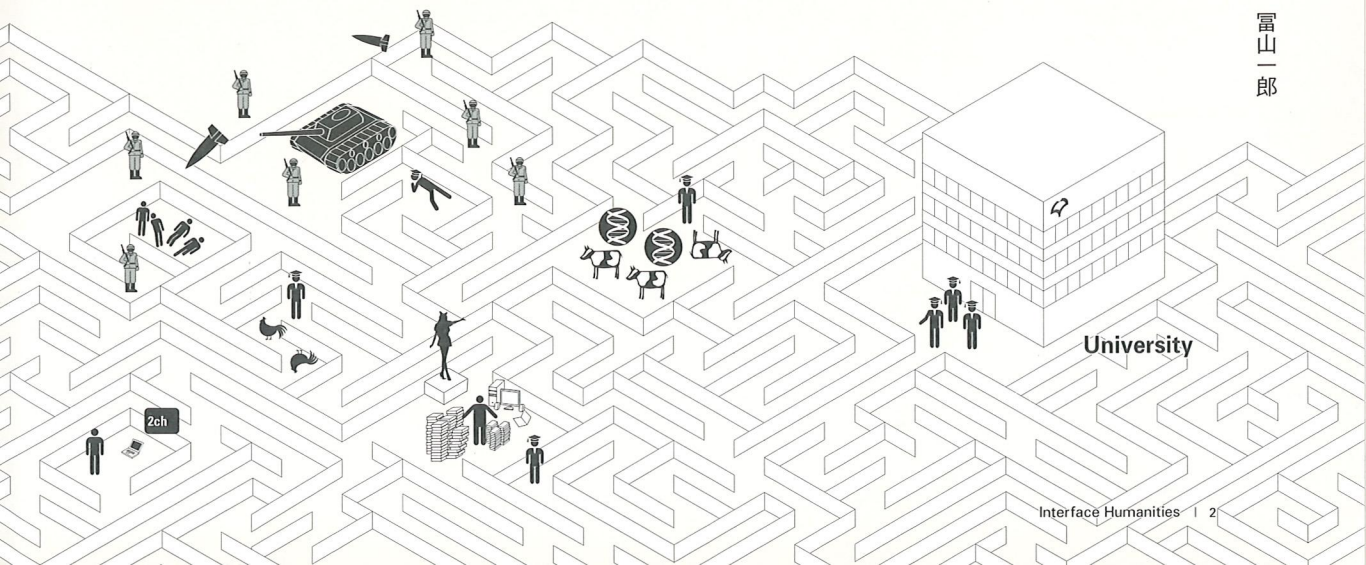
こうした流動と閉鎖の混在は、たんに大領域への解消の過程でもなければ小領域への分割でもなく、これまでの領域を自身を超えた新たな展開でもあるだろう。三年目を迎える「インターフェイスの人文学」の中で浮き上がってきたのは、今の私たちを取り巻いている流動と閉鎖そして脱領域化の入り乱れるこうした文化状況であり、一方で文学や芸術といった共通領域があると信じ、他方で国家という制度と文化の対応関係を想定しながら進めてきた人文学を、根本的に問い直していく作業の必要性に他ならない。プロジェクトの三年目にあたって、この出発点を再確認しながら、今後の方向性について説明する。

1 制度を作る

現在、プロジェクトにおいては、「トランスナショナル研究」「モダニズムと中東欧の芸術・

文化」「言語の接触と混交」「世界システムと海域アジア交通」「イメージとしての（日本）」「臨床と対話」といった六つのテーマの「モデル研究」が進められている。これらのテーマは人文学のディシプリンに対応するものでもなければ、個別の研究プロジェクトを意味しているのでもない。私たちは、従来の研究体制や分野の枠組みを前提にしたテーマ設定ではなく、テーマが新たな研究の形態を生み出していくことを目指しているのであり、「モデル研究」には、研究の制度がテーマを定義するのではなく、テーマが制度を構築するという発想の転換が含意されている。新たな制度構築を目指すという点において、課題ごとに集まっては解散する従来の学際研究や総合的研究とは決定的に異なる。また研究課題の学的意義は、これまでの枠組みの中ではすぐには定義されず、プロジェクト自身が、すぐさま定義できないが重要であると思われる課題を発見していく、いわゆる遂行的な作業に入ることになる。

学際研究であれ総合的研究であれ、学的に定義された課題とその分析に、求めるべき研究成果の方向が存在した。だが私たちのプロジェクトにおいて重要なことは、このような研究成果を性急に求めることではない。なぜなら、短期間で得られる研究成果を希求することが、従来の制度の追認



にどうしても結びついてしまうからだ。「インターフェイスの人文学」においては、それは学問ではない、それは大学で行うことではない、あるいはそれは私の専門分野ではないといった理由で対話を停止してしまうような、同業者集团的議論の様式は、まずは抑制されなければならないのである。また「モデル研究」の六つのテーマは、これから取り組むべき、定義されないが重要な課題の発見のための、窓口を示しているにすぎない。

2 臨床と情報

今述べた「定義されないが重要な課題」という形容矛盾に近い表現が示すように、そこにはテーマの発見とこれまでの学にかかわる制度批判が並存している。したがって課題発見は、同時に制度構築の問題でもある。ではいかなる制度構築を目指しているのか。それは、「定義されないが重要」というときの「重要」を考える場にかかわっている。

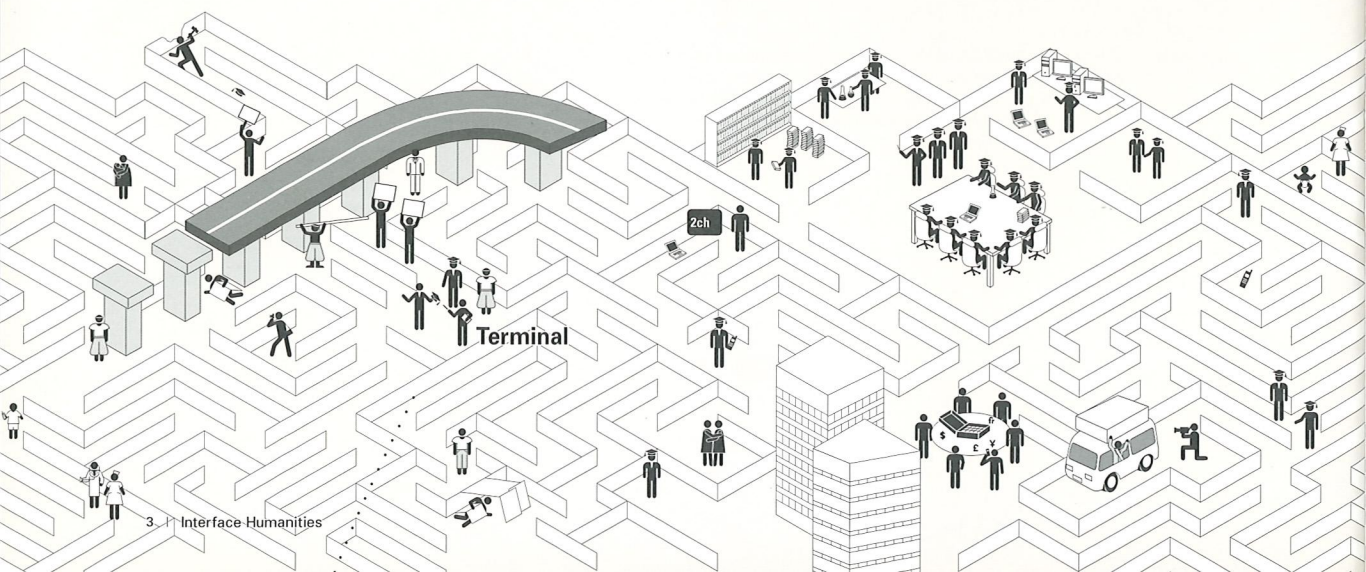
研究の重要性といったとき、近年盛んに口にされる「社会的ニーズ」とか「社会への貢献」ということが念頭に浮かぶ。だが何を社会というのか、何をニーズというのか。そしてその社会のニーズに応えようとする私たちは何者なのか。社会のニーズという言葉には、社会とは何かという根本の問題が不問に付されたまま、そこに想定された外部の声に应答するポーズをとり、同時に学知自身への内省的批判も不問に付したまま市場的価値や資金調達の問題へと解消するという思考停止

が存在してはいないだろうか。これに対し私たちは、学知の形態を内省的に検討し、新たな知の形態とそのための制度を模索するために、二つの領域において継続的に議論を積み重ねてきた。一つは具体的な対面関係にもとづく臨床という領域であり、今ひとつはあらゆる障壁を越えて拡大する情報という領域である。どちらの領域にも、大学とは異なる制度が存在する。また両者に関わる知の形態は、先に述べた文化の閉鎖と流動にも直結している。

3 社会学連携

私たちのプロジェクトは、こうした二つの領域と大学をつなぐようなネットワークの拠点の構築を目指している。そこでは、ニーズに応えるという漠然とした一方通行ではなく、人文学がどのような社会を構想しようのかという問いが設定されているのであり、この問いこそが、「定義されないが重要な課題」というときの「重要」を構成することになる。またこの問いは、臨床と情報にかかわる新たな公共圏の形成に、人文学がどのようなかわるのかということでもあるだろう。

私たちはこうした問いに正面から取り組むことを、「産学連携」ではなく社会との連携、すなわち「社会学連携」とよびはじめている。今後、この社会学連携にもとづく、大学を超えたネットワークの拠点形成を目指すことになる。このネットワークの拠点とは、臨床の現場に限定された知と高速で流通する情報を、それぞれの限界において重



ね合わせ次の複数の起点へと変えていく出会いの場であり、終着点と起点が錯綜するいわば知のターミナルとでもいえるべき存在である。そこでは、「定義されないが重要な課題」群の蓄積とこうした課題に取り組むべきネットワークの継続的な運営が行われることになるだろう。

4 「研究集合」宣言

この知のターミナルは、一方では臨床にかかわる複数の領域への開放と、他方では情報にかかわるメディア空間、とりわけ個々のメディアではなくメディアとメディアを連動させていくような制度（インターメディア）への連結により形成された、複合的な構成を持つ。またそこでは、膝を突き合わせ顔を見ながら交わされる言葉と電脳空間を光速で流通する言葉を、研究会やシンポジウムの具体的運営を通して、丁寧に織り成していくということが大切だ。

新たな人文文学の言葉の在り処は、知のターミナルにおけるこのような少し気の長い作業の中から生まれてくるのだろう。そしてその作業は、前述した「モデル研究」の中で、すでに始まっているのである。また「モデル研究」にかかわる個々の研究者は、これまでの分野や研究室への動かしがたい所属ではなく、臨床と情報空間を結びつける複合的なネットワークにそってしなやかに移動するゆるやかな連合体を形成することになる。またその連合体は、理系と呼ばれる人々も、学知の専門家以外の人々も、恒常的に参加することになる

であろう。私たちはこうした分野への所属とは異なるソフトな連合体を、研究集合とよびはじめている。

5 不安と戸惑い

ところで新たな制度を作るといつたとき、研究者の再生産という問題を抜きにしてはならない。学知の五〇年後百年後を展望して考えるなら、若手研究者の育成プログラムとその制度的保障が求められることはいうまでもない。継続的に課題が生成してくる環境をどのように整備し、その課題にかかわる若手研究者の再生産をいかに保障するのかということが問題なのだ。若手研究者に対して新たな研究体制のリアリティを示すことができないければ、当然のことながら新たな制度構築などありえないのである。

「インターフェイスの人文文学」では、学問分野を横断する多くの若手研究者を、世界中の研究機関から研究員として採用し、この若手研究者同志の議論を継続的におこなっている。この集まりこそ、これからの研究集合の内実を決定すると同時に、取り組まなければならない課題群を具体的に提示していく作業になるだろう。そこには当然のことながら、まず不安があり、戸惑いがあるだろう。だが、それでいいのだ。これまでの研究制度を前提にする限り表出しえない不安や押し殺されてきた戸惑いこそ、これからの制度構築の出発点であり、大いなる知的財産なのだから。

富山一郎（とみやま いちろう）

1957年生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。神戸市外国語大学をへて、現在、大阪大学大学院文学研究科助教授（日本学講座）。専門は、歴史学・文化理論。著書に、『近代日本と「沖縄人」』（日本経済評論社）、『戦場の記憶』（日本経済評論社）、『ナショナル・アイデンティティの脱構築』（共著、柏書房）、『暴力の予感』（岩波書店）、『Formations of Colonial Modernity in East Asia』（共著、Duke University Press）など。



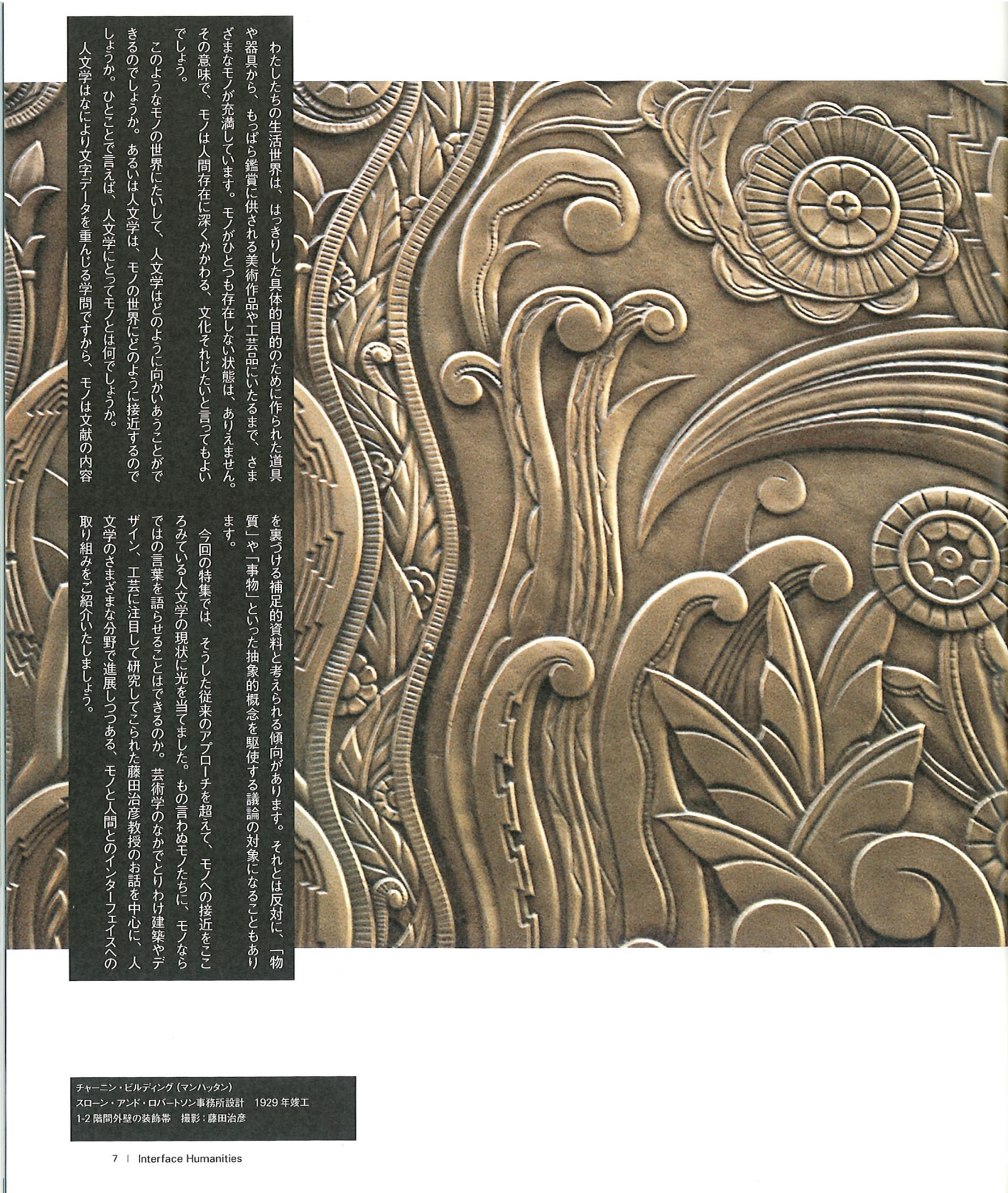


特集 モノの人文学

藤田治彦（大阪大学大学院文学研究科教授）
聞き手 三谷研爾（大阪大学大学院文学研究科助教授）



バック・ビルディング（マンハッタン）
設計者不詳 1886年竣工 1892-93増築
撮影：藤田治彦



わたしたちの生活世界は、はっきりとした具体的目的のために作られた道具や器具から、もっぱら鑑賞に供される美術作品や工芸品にいたるまで、さまざまなモノが充満しています。モノがひとつも存在しない状態は、ありません。その意味で、モノは人間存在に深くかわる、文化それじたいと言ってもよいでしょう。

このようなモノの世界にたいして、人文学はどのように向かいあうことができるのでしょうか。あるいは人文学は、モノの世界にどのように接近するのでしょうか。ひとこと言えば、人文学にとってモノとは何でしょうか。

人文学はなにより文字データを重んじる学問ですから、モノは文献の内容

を裏づける補足的資料と考えられる傾向があります。それとは反対に、「物質」や「事物」といった抽象的概念を駆使する議論の対象になることもあります。

今回の特集では、そうした従来のアプローチを超えて、モノへの接近をこころみている人文学の現状に光を当てました。もの言わぬモノたちに、モノならではの言葉を語らせることはできるのか。芸術学のなかでとりわけ建築やデザイン、工芸に注目して研究してこられた藤田治彦教授のお話を中心に、人文学のさまざまな分野で進展しつつある、モノと人間とのインターフェイスへの取り組みを紹介いたします。

—— 今回の特集は、人文学にとつての「モノ」を考えてみようという試みです。文学研究科のなかで、一番モノに近いところにいらっしゃる藤田先生に、お話をうかがおうと思います。先生のご専門は、もとと美学だったのでしょうか。

藤田 いえ、もともとは建築を含めて実際のデザインの研究をしていました。

—— そうすると実践的な仕事を発端に、だんだん歴史なり理論なりの研究に移ってこられたということですね。

藤田 そうですね。必ずしもデザイナーを目指していたわけではありませんが、少なくとも両方やっていました。

—— 伝統的な美学では哲学的な理論が中心になりますね。それに対して建築やデザイン、工芸といった分野は、どちらかといえばマイナーな印象を受けるのですが、今ではずいぶん変わってきているのでしょうか。

藤田 数の上からいえばやはりマイナーだと思います。ただ最近の動向を見ると、とくに若い世代の人が建築や各種デザインに興味を持っていますので、ベクトルでいうと上向きで、けつして小さくはないと思います。

—— それは、世の中の変化にともなって、美学の守備範囲が広がっているということですか。

藤田 いうなれば額縁の中の絵画だけじゃなくて、額縁の外の世界への視野の拡大、あるいは今までの芸術活動とその研究の枠組みの窮屈さから飛び出そうというような動きだろうと思います。

今日われわれ、とくに若い世代の人たちが接する芸術的なものというと、圧倒的に映画とか都市空間のなかの何かといったものが多いわけで、美術館のなかで見る絵画や彫刻というのは、むしろ非常に特殊なものになっています。

—— そういう意味で先生が建築とかデザインに目をつけていらしたのは、今の時代の先駆けといえま



クライスラー・ビルディング (マンハッタン)
ウィリアム・ヴァン・アレン設計 1930 年
撮影：藤田治彦

すね。いつごろからそういった研究をはじめられたのですか。

藤田 そうですね、僕の学生時代は一九七〇年代で、アメリカに留学したのが七九年です。

—— ちょうど世の中の変化というか、考え方の変化が起こった時期ですね。たとえば、広告などを記号論的に分析可能だというので、みんなが関心をもつようになったのが八〇年代の前半でしょう。

藤田 まさにそうです。ポストモダンニズムというところとなつては使い古された言葉になりつつありますが、僕自身が留学していたのは、まさにポストモダンニズムの時代です。そしてポストベトナムのアメリカ。ある意味でアメリカが自信を失いつつあった時代でもありました。

—— それから二〇年ほどたっているわけですけど、その間、デザイン美学でエポック・メイキングといえるような出来事や変化はありましたか。

藤田 その間というよりは、僕の留学する直前から留学中の時期にかけて建築の見方が大きく変わりました。それまではいわゆるモダンデザイン、近代建築が絶対的な地位にありましたが、歴史的建造物に対する見直しが行われつつありました。

その流れのなかで僕自身がした仕事に『マンハッタン（の建築）』（講談社）がありまして、表紙写真がとても象徴的です。つまり二〇世紀初頭の様式建築に焦点をあてながら、背の高い近代建築が背景としてある。同じような近代建築が次々とマンハッタンに建てられると、むしろ、歴史的建造物の価値が見直されるようになるのです。六〇年代まではこういう本は構想されなかったでしょうね。

—— 八〇年代半ば、陣内秀信さんの建築史の授業をうけたことがありました。そのとき、モダン建築がウルトラヒューマンになつていくのに対して、もう一度ヒューマンサイズの都市計画を回復しなければならぬというお話をされていたのが印象に残っています。ちょうど今の話と符合しますね。

藤田 陣内さんのフィールドはイタリアで、まさにヒューマンスケールの都市空間をずっとサーベイしてこられた方です。そういった西欧の伝統的な町や村につづいて、日本でも都市の見直しがだんだん始まりましたね。東京をはじめ阪神間も注目されるようになりました。

—— 京都の町家が最近はやっているのも、その流れの延長上にあるのですか。

藤田 そうだと思えますね。京都もずいぶんマンションが建ちましたが、ここ十数年ほどの間に町家が注目されてきています。もちろん不動産の価格がさがって住みやすく、借りやすくなったこともあり。でも非常にいい傾向で、たとえばそれをギャラリーなど文化的な空間にしたりすると、とても魅力です。美学ゼミには実際にそのような活動をしている院生がいます。できれば大阪もそんなふうになつていけばいいですね。

文字 VS モノ

—— 今回の特集に話をうつしますと、人文学の世界でモノというのは難しい存在で、文字と比べるとどうしても地位が高くない印象があります。研究



『マンハッタンの建築』
文＝藤田治彦／写真＝リチャード・ヘレンホルツ
講談社 1991年

のメインはやはり文字で書かれたデータあるいは文献で、それに対して文字化されていないモノはなかなか議論にのりにくい。哲学でも事物というのは人間から見ると一段下の存在です。

もちろん考古学や芸術学のようにモノを重視する世界もあります。それでもやはり、いわゆる作品とよばれるモノは価値が高くて、それ以外の道具は研究対象になりにくいように思います。その点、デザイン研究の目からみたらどうでしょう。

藤田 この話を始める前提として申し上げておきたいのは、デザイン学というのは必ずしもモノだけを扱う分野ではなくて、モノと情報の両方を扱う分野だということです。今おっしゃった考古学、芸術学等も文字ではない対象を扱うわけですが、モノだけ、作品だけではない対象を語れない。それに科学的な根拠とか資料をきちんと添えたいと思うと、モノと文字あるいは言葉の対応をしつかりさせる方向に変わっていきます。

なかでも美術史などは典型だと思います。これはアート・ヒストリーという言葉があらわすように、アートというモノに対して、ヒストリーというのは文字で記された歴史のことですから、両者の関係をきちんとはとらえようとしたものですね。それは建築史、デザイン史も同じです。やはりモノだけでは語れない。それにまつわる記録とか人々の考えを対応させて研究するというアプローチです。

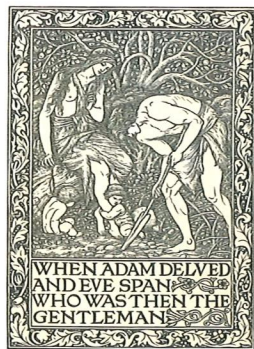
ただ、僕自身が専門にしているウィリアム・モリスは「いわゆる歴史は王や勇士のことを憶えている。なぜなら、彼らは破壊したからである。芸術は民衆のことを記憶している。なぜなら彼らは創造したか

らである」といつています。この場合の歴史というのは、王や將軍が誰を打ち破ったというような権力者の歴史でした。今でも本質的にはそうでしょう。権力者が残した言葉や権力者にまつわる記述が歴史である、と近代デザインの先駆者、モリスは批判しているわけですが、それに対して民衆の芸術とは、芸術家や名もなき工人、職人による創作のことをいつているんですね。彼らは名前も言葉も残しませんが、モノを残すわけです。

ただ、今までのところは、そういったモノのなかでも古典として認められるような作品や、ある王家に伝わったものなど、言葉を操ることができる階級に属す作品がその芸術の歴史をも構成してきたといえると思います。しかし、状況は変わりつつあります。人間とはおもしろいもので、いつの時代にも個人に期待しているところがあつて、デザイナーやアーティストなどモノの作り手がどういう人だったかという話を好むのは事実です。これは否定すべきことではなく、なぜ人間は作品の作り手とかその背後にある人間関係に興味を持つのだろうと、むしろ積極的に注目をして、それも研究していけたらいいだろうと思います。

—— 今回五人の方にそれぞれひとつのモノをとりあげて原稿を書いていただいています。そのなかでは、文化形成におけるモノの役割に注目していただきました。つまり、言葉以外の力が歴史を決めている、あるいは人間の文化の大きなファクターになっているという観点ですね。

山中浩司さんによると、聴診器という道具が医者と患者のあり方を決定するといえます。筒井はる



ウィリアム・モリス著『ジョン・ボールの夢』口絵 1892年
エドワード・バーン＝ジョーンズによる木版
「アダムが耕しエヴが紡いでいた時」

医師と聴診器

山中 浩司

大学生協の購買部に行くと、バゾコンのソフトや、文房具や、雑誌や、お菓子と並んで、聴診器を売っている。ガラスのケースに並べられた銀色の道具を見て、一瞬とまどうのであるが、医学部があるのだから当然である。思わず、これ医者でなくても買えるの？と聞いてしまいたくなるのは私だけだろうか。聴診器は、医療器具の中でも際だって特異なものであるように思う。聴診器という言葉がタイトルにある本を開けてみよう。登場するのは、聴診器でなく、旅行の自慢をしたり、医の心得を説いたりするお医者さんばかりである。かように聴診器が医師のトレードマークであるのは、洋の東西を問わない。医療社会学者のアトキンソンは、聴診器は、「研修医たちが医療ヒエラルキーの中で自分たちに与えられる新しい地位を誇示する際にも、重大な演劇的価値をもっている」と述べている。でも、一体どうしてこんな簡単な器具が、それほど重大な演劇的価値をもつのだろうか。それに、いまや発明後二世紀にもなるという器具が、さしたる根本的な技術革新を経たとも思えない形で、今も現役で活躍しているというのも、あの膨大な先進テクノロジーを動員している医療の世界では実に不思議ではないか。

聴診器は、医学史では、一八一九年にフ

ランス人の医師ラエネクが発明したということになっている。この発明に対する医学史家の評価は、大変なものである。ライザーは、「聴診器が医師におよぼした影響は、印刷術が西欧文化にもたらした影響に似ていた」と言っているくらいだ。「患者の体験や感情から遠ざかって、患者とはより深く、患者の体内の音とはより深く」かわることを可能にしたという。背中から患者にしがみついて肺や心臓の音を聞いているラエネクの絵がある。当時の医者と富裕なクライアントの関係からすると、やりにくい診察法だ。特に患者が婦人であると。それまでしゃべり続けてきた患者は、聴診器の出現で黙るようになる。胸の秘密の音を聞き取られることで、患者は、医師の託宣を不安の中で待ち受ける人になる。社会学者のカッツは、これを「沈黙の関係」と呼んでいる。医療プロフェッションの高圧的な態度のシンボルにもなっているわけだが、今となってはこういうお医者さんもなつかしい存在となりつつある。

山中浩司（やまなか ひろし）

一九五九年生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士課程退学（経済政策論）。大阪大学教養部専任講師を経て、現在、大阪大学大学院人間科学研究科助教授（医療社会学）。編著「視覚と近代」名古屋大学出版。共著「科学思想の系譜学」ミネルヴァ書局など。

Heinz Schott (Hrsg.), Die Chronik der Medizin, Chronik Verlag, 1993





ベートーヴェンが所有していたピアノ エラール (Erard)、1803 年、パリ製
州立リッツ博物館所蔵 撮影：山本寛夫

音楽を読み解くための ピアノ

筒井はる香

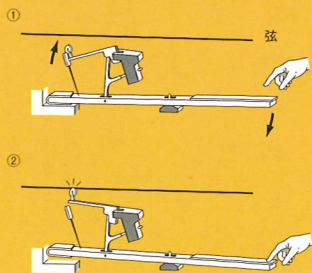
ベートーヴェンは生涯にわたり三十二曲のピアノ・ソナタ作曲している。ここには、ハイドンの影響を強く受けた古典派的作風から、自己の様式を確立するまでの精神的／技術的軌跡が見て取れる。だが少し視点を変えれば、これらの作品が当時のピアノの製作状況と深く関わっていることも見逃せない。ベートーヴェンの生きた一八世紀後半から一九世紀前半にかけては、ピアノ史の中で最も改良が進んだ時代として位置づけられるからである。

例えば、『ワルトシュタイン』op.10は、英雄主義的思想に影響を受けた作品であると同時に、当時バリで最も人気の高かった楽器製作家セバスチャン・エーラーから贈られた「最新式」のピアノにインスピレーションを受けて創作された作品でもある。

この作品では、以前のベートーヴェン作品によく登場した美しいメロディラインは徹底的に排除され、その代わりに和音の連打（時に強打）や低音の唸るようなトレモロによる重厚な表現が支配的である。これらは、華奢で音の減衰の速いウィーンのピアノではなく、タッチこそ重いが、音の持続性が強くて低音のよく響くイギリス式アクションのエンラール製ピアノで、最大限の効果を発揮できる技法ばかりである。またペダル記号に着目すると、従来の作品のように比較的長

い小節数にわたってペダルを踏みっぱなしにするのではなく、細かい単位でペダルを頻繁に踏みかえるような指示へと変化している。

このように当時のピアノとの関わりを考えれば、ベートーヴェンの『ワルトシュタイン』が、抽象的な思考によって構築されたというより、最新式の楽器を弾きまくり、肉体を通じて感得された技術を盛り込んだアイデア満載のスケッチブックのようにさえ見えてくる。ピアノ作品の歴史は、決して作曲家の発想だけではなく、ピアノの技術的革新によって刺激されてきたのである。そして案外こうした解釈の方が真実に近いかもしれない。



イギリス式アクション

筒井はる香（ついでに、はるか）

一九七三年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了（音楽学）。博士論文「二九世紀前半のウィーンにおけるフォルテピアノ——製作から音楽へ」。共著として『ピアノを弾く身体』（岡田晩生監修、春秋社、二〇〇三年）がある。

（一）
香さんのピアノの話でも、ペダルの構造など製作技術の進化がベートーヴェンの楽曲のスタイルに変化を与えている。そういう風に、モノじたいの発揮する力がいろいろな格好で働いて、それがひとつの文化のかたちを決める場面もありますね。

藤田 たしかにそうだったことは文字に残しにくいわけで、いわばモノじたいが歴史を語るということですね。そのあたりの研究については、コンピュータやビデオをはじめ、われわれが手にしている新しいメディアやテクノロジーが新しい研究の可能性を開くかもしれないですね。

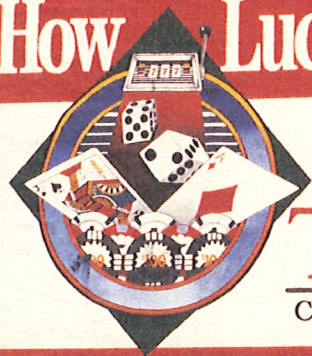
—— 文字を介さない人文学の研究成果は、まだわれわれには考えにくいんですけど、今おっしゃったようにメディアのかたちが変われば記録のかたちも変わってきて、言葉で説明していたものを画像で蓄積することもできますね。

藤田 言葉の優位性というのは、それ自身が優秀であるとともに、メディア技術の不在によって保たれてきた部分も大きいわけです。そのなかでメディア環境の変化自体が人文学のスタイルを変えつつあるのではないかと。それにともないモノへの関心も変化しているのではないかと思います。

モノへの接近方法

—— もう少し立ち入って、人文学はどうやってモノを捉えていくかを考えると、おおむね三通りあると思うんですね。ひとつは、モノそのものに固有の価値があるとみる。芸術作品なんかは特にそのよう

How Lucky Can You Get!



Call Atlantic City: 1-800-THE-TROP
or our N.Y. Office: 1-800-833-0158

TROPWORLDTM
CASINO AND ENTERTAINMENT RESORT

REMCO

マンハッタン (ミッドタウン) 風景
西 37 丁目 1990 年
撮影: 藤田治彦



な考え方ですね。二つ目は、モノは何か別のものをあらわしているという考え方。モノから何か意味を読み取っていくというアプローチですね。三つ目は、モノとは使うものであるから、その機能、役割を考えていくことがモノに対する理解の仕方なんだという考え方。

藤田 最後の考え方は、人間工学とか構造研究の立場からなされているもので、いわばまともな、モノに対するアプローチだと思いますね。それに対して先の二つは機能の研究をする人には扱いにくいもので、そういう意味で人文科学ないし社会科学の研究者がアプローチすることによって独自の冒険ができる領域かもしれませんね。

—— いかに関立つかという観点からさらに新しい道具を開発するのが工学的研究の道筋だと思ふんですけど、それに対してモノが人間にとって何を意味しているのかというのは、工学的にははつきりしない分野なので、そこに人文科学の果たすべき仕事があると言えるのではないですか。

藤田 デザインの分野では、これまでもビジネスのなかでひとつの利益につなげようということと、プロダクト・セマンティクス（製品意味論）など、記号学や意味論の視点から研究がなされています。しかし、人文科学の分野では意味論・記号論をも含めむしろもっと広い視野にたった研究、あるいは批判的な研究がなされるべきだろうと思います。

—— おそらく機能や役割を考えることと、意味や価値を考えることは別のことではなくて、両方考えていくことが重要なんでしょうね。デザインの分野において機能はともかく、たとえば椅子なら、椅

子一脚の意味を明らかにする方法というのは現在確立しているのでしょうか。

藤田 いえ、確立しているとはいえないと思います。機能や用途、使い勝手なんていい方をしますけれど、それを細かく実証的に検証すると、たとえば椅子にはシンボリックな意味がありますね。社長の椅子、玉座といった言葉にも象徴されますように、その所有者を象徴する社会的な意味や機能がありますから、そういったところを合わせて、考察していく必要があります。

ほかに、たとえば建築史というのは長い、伝統的な積み重ねがありますが、その建築においてもある意味では解体が行われ始めています。今、建築と都市の境目がわからないですよ。どこまでが建築でどこまでが都市か。逆に、今までこれが建築だと思われていたものと、インテリアデザインとか家具のデザインというものの境界があいまいになってきています。

そうすると、それまでのシンメトリーの古典主義的な建築像だけを思い描いていたのでは現代の建築、プロダクトの研究には適切ではないわけで、そういう意味ではいろいろな側面からの建築の捉え方が今模索されている状態だといえると思います。

作り手にとつてのモノから受け手にとつてのモノへ

—— 今回文化人類学の森田良成さんにゴミという廃物を対象に原稿をいただいているのですが、こ



藤田治彦（ふじた・はるひこ）

1951年生まれ。大阪市立大学生生活科学研究科博士課程修了。学術博士。京都工芸繊維大学助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授をへて、現在、大阪大学文学研究科教授（芸術学講座）。専門は環境美学。著書として、『ウィリアム・モリス 近代デザインの原点』（鹿島出版会）、『現代デザイン論』（昭和堂）、『国際デザイン史』、『アート・アンド・クラフツと日本』（ともに編著、思文閣出版）など。撮影：大橋哲郎

空き瓶と町

森田良成

道脇に設けられた簡素な棚に、十本、多いときは二〇本ほどの酒の瓶が並べられている。中身はガソリンだ。ガソリンスタンドからポリタンクに入れて買ってきたものを、空き瓶に移し替えて売っているのだ。こうした瓶を町のあちこちで見かける。

これらの瓶もいづれ用済みとなれば、くず屋の男たちが集めて歩くだろう。東インドネシア、ティモール島西端にある町クパンは、周辺の島やその他の地域からきた人々でなる多民族社会である。インドネシア全体から見れば辺鄙な地方都市だが、「開発から取り残された」東の村からは、現金収入を求めてティモールの人の若者がやってくる。くず屋は、都市の下層を形成する彼らの典型的な仕事のひとつである。

庭や店先での買取値をめぐるしばしの交渉を終えて、または打ち捨てられたゴミの中から拾い上げられて、瓶は彼らの荷車に積まれていく。町のすみずみまで拡散し、商品としての使命を終えた瓶は、彼らの安価な労働力と人海戦術的な機動力によって再び一つの場所を目指し集まり始める。

瓶は彼に現金とともに都市の経験をもたらし。荷車を次々に追いつき、時に進路を妨げる圧倒的な交通量を、彼は瓶の重量がもたらす疲労感と苛立ちとともに経験する。大量の商品の残骸は、この町にたしかに豊

かな生活が存在していることを彼に物語る。だが同時に、買い取りの度に繰り返されるごくわずかな額をめぐるやりとりによって、肌の黒い貧しい田舎者として彼をまなざす町の人々にしたところで、その多くは自由になる金など大して持っていないのだと知る。

彼が一本三五〇ルピアで買ったビンタンビールを、ジャワ人のボスは五〇〇ルピアで買い上げる。ボスは次の業者に一五〇〇ルピアで売っていると、ある者は見ている。コンテナに詰め込まれて港を離れた瓶は、三日かけて海を渡り、東ジャワのスラバヤに上陸する。工場で洗浄されて、新しく中身を入れられ、ラベルを貼り直されると、また海を渡りどこかへ散っていく。



森田良成（もりた・よしなり）

一九七六年生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程在学中（人類学）。論文に「ホームレスの物語」大阪大学大学院人間科学研究科修士論文など。現在インドネシアで調査中（文科省アジア諸国等派遣留学生）。

の場合は極限の、用途をまったく失ったモノですね。それがインドネシアの社会で一定の役割をはたして、意味をもつて流通している。これは美学の立場からいえばまったく正反対の極にありながら、なおかつ人文学の研究として成立している例として、非常におもしろいと思いました。

藤田 今まで芸術作品として認められてきたモノは、名のある芸術家がつくって、しばしば有名な美術評論家がそれにコメントを書き、そして有名な権力者が所有しているわけですね。それに対してモリスの発言にもあるように、誰がつくったかわからないアノニマスなモノも研究の対象になるわけです。日本では柳宗悦の民芸運動もあって、無名の工人が生み出す日常的な美への評価が高まりました。そうしたアノニマスな世界をとりこむことによって、せいぜい数百人、数千人だった直接関係する世界が、数万人、数十万人という広い地平を獲得するようになる。しかしじつはそれ以上に、そういったモノすらも残すことができない人が何億人もいる。そういう社会の実態に目を向ける必要があります。

実際のところ、これまでの人文学はそういうヒエラルキーの上の部分だけを扱ってきたと思うんです。言葉を知っている人たち、言葉を残した権力者だけを扱う。そしてその次の段階として、言葉は残さなかったけど、モノは残した無名人々も研究対象になる。しかし、じつはそれでさえもヒエラルキーの上の第二層までの少数者にすぎないのです。それ以外の何億、何十億の人がいた、そして今もいる、という実態に目を向けると、いったいどういう研究をしていくべきなのか。

緑黒釉掛分皿

猪谷 聡

緑と黒のあざやかな対照。ちょうど真ん中で染め分けられている。大きさは直径五寸で、料理を取り分けるのに適している。鳥取県にある中井窯の生産で、手づくりの和皿だ。この皿は「民芸」品である。「民芸」は、いまでは身近な言葉として普及しているが、一九二〇年代から登場した新しい言葉であった。もともとは、「民衆的工芸」

の略であり、一般の人々が日常の生活で使う日用品およびその生産の活動を意味する。当時、日本の伝統的な工芸は低くみられていた。工芸の見直しを図るべく、民芸の思想を提唱したのは柳宗悦である。柳は、『白樺』の同人としても知られるが、その後、民芸運動を推進し、一九三六（昭和十一）年、東京駒場に日本民芸館を設立した。

民芸運動は、全国的な広がりを見せ、古くからの民芸品の蒐集が進められるとともに、各地に残る民芸の再興を促した。最初に再興された民芸は鳥取県の牛戸窯であり、伝統的な牛戸の技法を活かして考案されたのが「緑黒釉掛分皿」であった。そうして新しく生み出された皿は、日本民芸館に現在保存されている。

写真の皿は牛戸窯の脇窯である中井窯において最近つくられたものである。掛分皿の製作はいまなお続いており、鳥取の「たぐみ工芸店」などで購入できる。掛分皿に直

接ふれ、そして生活の中で実際に用いてみるならば、鑑賞するときとは異なる、何かを感じるだろう。それは、生活にそつと潤いを与えてくれるような楽しさといえるかもしれない。

現代の食卓で何気なく使われているこのお皿を通して見えてくるのは、民芸が受け継がれていく姿だろう。



猪谷 聡（いのち・さし）

一九七六年生まれ。石川県金沢市出身。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（美学）在学中。専攻：近代工芸史。著作：共訳『ダーティ・インターナショナル工芸家会議報告書』思文閣出版。

それは文字を知らない、あるいは力のない特殊な人々がいるということではなくて、われわれひとりひとり、別な局面に立つと何億、何十億のほうに属しているということです。消費者という立場がそうですね。ですから、すべての人間の問題だというふうにつまねおしてモノとの関係を見直さねばなりません。

—— お話にでた消費者というのは受け手ということですよ。つまり、作り手にとつてではなく、受け手にとつてのモノの意味とか役割は何なのかという問題が見えてきている。そうしたときに人文文学のすべき仕事は俄然、視野が広がくと思うんです。

人生をデザインする

藤田 その関係でいうと、私が力を入れている実践的な研究にアーツ・アンド・クラフツという芸術運動と、セツルメントという地域福祉の運動があります。アーツ・アンド・クラフツ運動というのは、もともとモリスが先導した芸術と社会の理想を追究した一九世紀の運動ですが、この夏にはロンドンでアーツ・アンド・クラフツ会議を開催します。これは二〇〇一年から行っているものです。去年はCOEの共催で大阪と横浜で開催しましたが、セツルメント運動とは歴史的に表裏一体をなしていたということで、セツルメント史の会議も同時に連続して開催します。一週間の前半を芸術運動の会議にして、後半は地域福祉の会議をすることになります。

—— セツルメント運動というのは、具体的にはど

モノ・ツクモ、カガミ・ココロ

荒木 浩

百年を経た器物には精霊が宿り、人の心を惑わす付喪神^{つくもがみ}となるという。「ツクモガミ」とは何か。『付喪神(記)』に

いう器物自体が描かれていないようだ。カガミはツクモガミらしくない?

「百年に一年たらぬ付喪神」と引かれる『伊勢物語』の一節は、本来老女の白髪「九十九髪」の謂い。つくも髪は、様子の似たつくも草に由来するとされ、「百」から一を引くと、「白」が残るという文字解

それは、いわば「忠実な」「鏡の中の風景」(多田智満子)のゆえか。「鏡には色かたちなき故に」、万象をうつす(「徒然草」)。妖怪の証しの目や口は、その本質に背く。また中世では、鏡に像が映ることを、ごく普通に「移る」と表記する。鏡は、あらゆるモノ(地獄の淨玻璃^{じようはり}の鏡は人の生涯を映す)を写し出しつつ、また、移し籠める無限の空間であった。神も移り、宿る(御神体など)。カガミは、それ自体が神霊であつた。されどまた鏡は、鏡にすぎない。像が過ぎ去れば、もとの、無垢の姿でそこにある。まさに永久で究極の「モノ」ではないか。

私はこれを「作物神」の義と読む。宮中には「作物所^{つくものじろ}」があり、器や卓などの調度類を、内匠^{たくみ}が作る場。和語「モノ」は、霊的存在の総称でもある。付喪神とは、人が作ったモノ(ツクモノにモノ(霊、喪)が付き、モノ(ツクモガミ)となったものだ、と解いてみるのだ。

『徒然草』は、人の心を、そんな鏡に譬える。木霊^{こだま}の出没する、主無き家の風景だともいふ。カガミ、すなわち、人のココロ、「それらはすべてここにある」と(立原道造)。

ところで、多様で奇恠な器物妖怪群の絵として、より著名なのが「百鬼夜行絵巻」だろう。そこには、お歯黒をむき出して化粧する妖怪に、ひれ伏すように奉仕する鏡が描かれる。恐ろしげな手足と、目鼻口を強調して描かれる同絵巻の「モノ」の妖怪たちの中で、この絵の鏡には目も口もなく、あたかも、人間の侍女が鏡を戴くようにも見える。妖怪の異形性は小さく、つましい。『付喪神』には、そもそも鏡と

荒木 浩(あらき ひろし)
一九五九年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程退学(国語学国文学)。愛知県立女子短期大学、同県立大学、大阪大学教養部などを経て、現在、大阪大学大学院文学研究科助教授(日本文学)。日本中世文学を中心に研究し、編著に「心」と「外部」―表現・伝承・信仰と明恵(夢記)―(「大阪大学」論文に「徒然草」というパースペクティブ)。(「新しい作品論」)、(「新しい教材論」)(「日経文庫」3)、右文書院ほか。

ういったものですか。

藤田 これは今日的にも注目すべき運動です。典型的パターンとしてオックスフォードとかケンブリッジの学生が、大学の三・四回生くらいからこの運動に関与し、多くの場合、卒業後ロンドンに就職するんです。弁護士とか銀行員になるのがひとつの典型かと思いますが、彼らは就職後ロンドンのスラム街のセトルメントに住んで、夕方職場から帰ると地域福祉の活動をするんです。それによって彼らも家賃をたないし低額にしてもらったり、いろいろなメリットがある。地域の文化向上にも貢献できるし、彼らにとつてもいろんな経験を積むことができます。

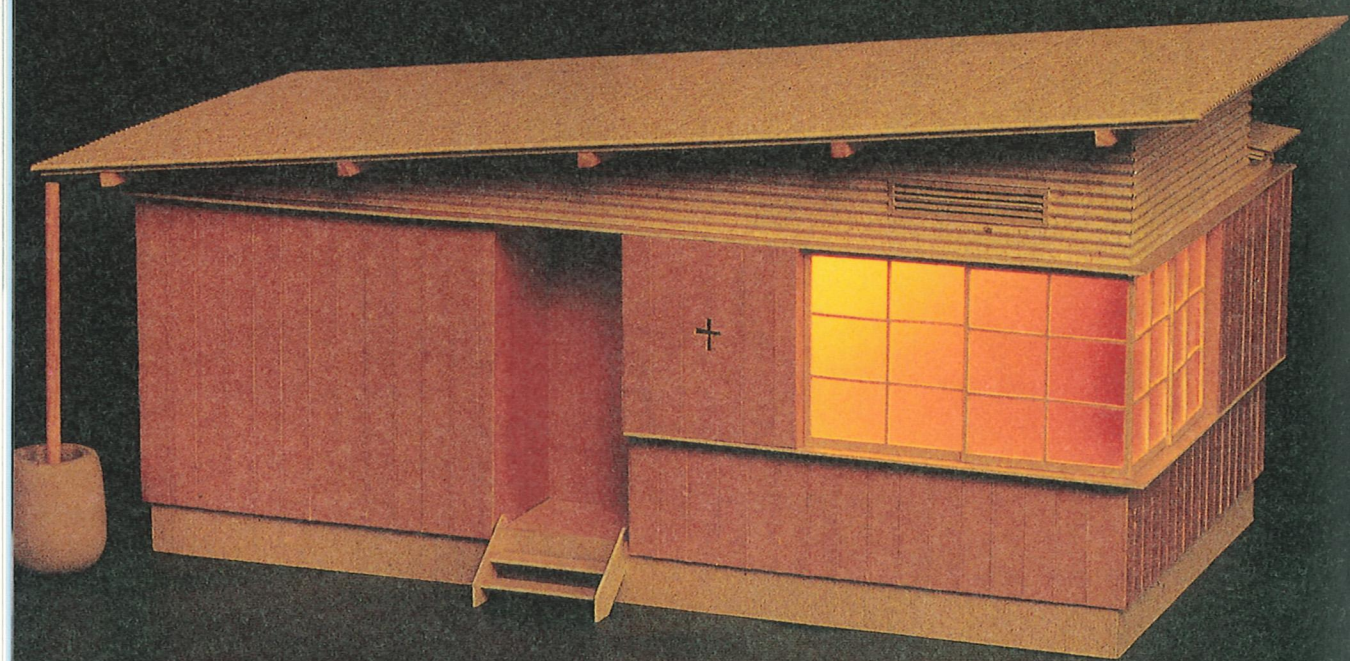
こういったパターンを、われわれが直面しているいろんな問題に応用することができないのではないか。ひとつは介護の問題ですね。誰しもいつかは直面する、社会のそういった問題にどう対応するかと考える場合、わりとこういう一九世紀的な運動に学ぶことができないかと思っているんです。今年からは福祉の先進国である北欧からも参加者をえて、介護の問題等についても話しあいます。さらに家族の関係や構造の変化などいろいろな考えてみたいと思っています。

一般にデザインというと、モノをつくる、あるいは空間をつくることだと考えますよね。会議ではそれだけじゃなくて、人間関係をデザインするとか、あるいはわれわれの人生をデザインするというところまで広げて考えてみたいんです。自分の生涯を設計すると同時に、社会全体のあり方を考え直す、リ・デザインするというのが、少なくとも意見交換の

上右 『付喪神』（京都大学付属図書館蔵。写真も同館提供）。煤払いと称して捨てられた付喪神の古器物がそれを怨んで妖物へと変身し、また後に発心することを描く中世の物語。その冒頭部、捨てられた器物に目鼻口が生まれ、また手足がはえる。

上左 『百鬼夜行絵巻』（大阪市立美術館蔵、田中貴子他著『図説 百鬼夜行絵巻を読む』、河出書房新社刊、による）の鏡に向かう妖怪。河鍋晩斎もほぼ同じ図柄を描く（『晩斎百鬼画談』）。『百鬼夜行絵巻』は、『付喪神』の一部が独立展開して成立したともいう（田中貴子）。『図説 百鬼夜行絵巻を読む』によって、多くの絵と、花田清輝、流澤龍彦、小松和彦のエッセイを併せて、その多様な世界を概観することが出来る。

下 立原道造設計のヒアシンス・ハウス模型（若林美弥子制作、『季刊チルチンびと』No8、風土社刊、による）。建築家でもあったこの作家が構想した、究極の理想の小さな空間。



かたちでできる場にしようと考えています。

具的な例をあげますと、われわれは二〇歳そこそこで大学を卒業して就職するのがパターンですよね。それで六〇歳くらいまで仕事して、退職する。それから第二の職場へいくとかボランティア活動するとか、いろんなパターンが増えつつありますが、基本的な労働パターンは変わりませんね。でももし、大学を卒業した後の二〇代はボランティア活動をするというパターンができたらどうなるか。若い多様な感性をもっていて、なおかつ体力もある時代、まずボランティア活動をして、就職はそれから後というパターンとか、あるいは一九世紀のロンドンを想像するならば、週の半分は弁護士事務所や銀行会社で仕事をして、残りの半分はボランティアをして、もちろん土日の休日は自分のために使うというパターンを考える。

これをごく一部の人がしていたのでは、はみ出し者といわれかねませんから、「社会的にこんなかたちだつてあるんじゃないか」と提案したり、あるいはある文化ではこんな試みも始まっているという事例を互いに学びあうのです。ライフデザインとでもいいますか、そういう社会環境をも含みこむようなものへとデザインの視野を広げるわけです。

モノをつくらず世界を豊かにする

—— 人文学はモノの世界に何をもたすかという話になってくるかと思うんですが、セツルメント運動の話の伺っていると、デザインにもハードウェアだけ

ではなくソフトウェアをデザインするというアプローチがあるわけですね。しかも人生という非常にあいまいなソフトウェアをもデザインしうる。

僕が最初考えていたのは、人文学は少なくとも工学的なモノをつくる世界に対して、モノをつくらない世界という立場でモノに接するという理解だったんですが、それは狭い理解で、実際いろんなかたちで人文学もモノをつくりうるということがいえるのではないかということです。

藤田 人間関係をつくる、それから人生というものをつくり直すことを考えていけるわけです。それも個人ではなく、社会全体の可能性を模索する。今のモノづくりの最前線というのは、むしろソフトウェアが前を行っている時代ですから、広い意味でのモノづくりを人文学はしうると、僕自身は考えています。

一方で、人文学はモノづくりをしないという考え方も僕は嫌いではないんです。あくまでハードウェアとしてのモノをつくらない分野にも別の価値があると思っていて、それは現在の世界の状況へのひとつの批判にもなりうるのです。まさにいらないモノがあふれる世の中で、狭い意味でのモノづくりはしないというのも、むしろ貴重なひとつの領域だと思えます。

モノについて語ることを通じて、世界を豊かにする。実際われわれが有名な絵画や建築作品を見たときにも、モノとしてだけでなく、作品にまつわる物語と一緒に見ているはずなんです。たとえば椅子ひとつとっても、デザイナーがこんな工夫をしてつくったものなのか、あの映画のなかでこういう俳優がそれに座ってこんなセリフをいったとか。たとえば、それに対して映画評論家は、さらにそこに新しい物



第2回アーツ・アンド・クラフツ・セツルメント会議

2002年7月(ロンドン)

大阪大学の大学院生も参加してアーツ・アンド・クラフツ運動の拠点でもあったトインビー・ホールで開催された。

語を加える。これも広い意味でわれわれの仲間がしてきた仕事ですよ。実際に物体としてのモノをつくらずに、モノを豊かにしているのです。こうした人文学が本来果たしてきた役割、これも僕は否定しようと思わないどころか、引き続き重要な活動だと思っています。

—— 物語化というお話は非常におもしろいですね。著名な作品についての著名な物語もあるけれど、無名の人の手になる、つまらないと思われていた道具とも、新たな物語を介して新しい関係を取り結ぶことができる。そこに、言葉の学である人文学の意義があるとと言えるわけですね。

